

ミツカン水の文化センター

第27回（令和三年度）定点調査

「水にかかわる生活意識調査」結果レポート

温室効果ガスの排出ゼロ実現のために払える金額、平均1,265円/月

【調査期間：2021年6月3日(木)～8日(火)／対象エリア：東京圏・大阪圏・中京圏】

ミツカン水の文化センター（株式会社Mizkan Partners 広報部内）では、令和三年6月に、東京圏（東京・神奈川・埼玉・千葉）、大阪圏（大阪・兵庫・京都）、中京圏（愛知・三重・岐阜）の在住者1,500名を対象とした「水にかかわる生活意識調査」を実施し、このほど集計結果をまとめました。

今年は、継続調査の設問に加え、飲み水としての水に対する意識や、地球環境への意識の変化を見る趣旨で、過去に調査していた該当設問を再調査し、10年前（一部20年前）との比較を行ったところ、総じて各項目で数値が減少。継続調査を行っている「水と災害」に関する設問においても同様の傾向が見られ、全体的に水への関心が下がってきていることをうかがわせる結果となりました。この他、コロナ禍における生活の変化を探る調査も実施しました。また今年も、当センターのアドバイザーであり、東京大学 大学院工学系研究科 教授の沖大幹先生に、調査結果の解説をいただきました。

本調査は、生活者の水とのかかわりや意識を明らかにすることを目的とした定点調査です。継続性を重視しながら、時代のトレンドを踏まえた設問なども随時取り入れる形で1995年より毎年6月に実施しており、今年で27回目となりました。

【今年の調査データおよび過去（第1回～26回）の集計概要は、別途HPで紹介しています。】

《調査結果》

【1】水のおいしさは“自然の水”から“買う水”へ？

…「一番おいしいと思う水は？」に対し、

「市販のペットボトル入りの水」を選んだ人が「湧き水」を上回りトップに
「ウォーターサーバーの水」を含め“買う水”が過半数を超える結果に

【2】災害時の水の備えをしていない人が増加中

…「災害時に対し、普段どのような水の備えをしているか？」に対し、

「何もしていない」の回答率が4割超に

「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」は過去ワースト2

【3】20代は環境への支出に積極的？

…「温室効果ガス排出ゼロを実現するために毎月払える金額は？」について、
回答金額の年代別平均は、20代が1,470円で最も高い結果に。

【解説】 Oki's View

…沖大幹先生による解説

【この件に関するお問い合わせ先】

ミツカン水の文化センター ホームページ内、お問い合わせフォーム（下記URL）よりお願いいたします。

<https://www.mizu.gr.jp/customer/group/mizu.html>

(TEL.03-3555-2607)

※ミツカングループでは、新型コロナウイルス感染症に対する取り組みとして、テレワーク勤務を推進しております。
誠に恐縮ですが、ホームページからのお問い合わせへのご理解とご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

《結果の抜粋と掲載ページ》

■ 調査概要		2ページ
■ 水意識の変遷		
◇ 一番おいしいと思う水「市販のペットボトル入りの水」がトップに…トピック【1】		3ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ①		3ページ
◇ 地球温暖化に伴う気候変動への危機意識“意識している人”が大幅に減少		4ページ
◇ 地球温暖化に伴う気候変動の危機項目トップ3に変化はないものの、自身の生活に直接影響を及ぼす危機には敏感？		4ページ
◇ 温室効果ガス排出ゼロ実現のために毎月払える金額のボリュームゾーンが「500円未満」に		5ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ②		5ページ
◇ 100年後の水をとりまく環境、全体的な数値の減少は環境が変化しないとの予測？		6ページ
◎ 沖大幹先生による解説～Oki's View～ ③		7ページ
■ コロナ禍における日常の水意識		
◇ 手を洗う頻度は約7割、1回あたりの手を洗う時間は約半数が「増えた」 入浴やシャワーの頻度は大多数が「変わらない」		7ページ
◇ 料理の頻度は約3割が「増えた」も、洗濯・掃除は8割超が「変わらない」		7ページ
◇ 海・川・湖に行く頻度は約4割が「減った」		8ページ
◇ 水道料金が「増えた」人は2割程度		8ページ
■ 節水の意識と行動		
◇ 日常生活での節水意識および行動は、昨年からはほぼ変化なし コロナ禍で節水意識が上がった人は2割程度		8ページ
◇ 日常生活で実践していることは項目ごとの取り組み率に変化あり		9ページ
■ 水道水に関する意識		
◇ 水道水の評価は、全体、居住地別ともに昨年とほぼ変わらず		9ページ
◇ 水道水への不満の全体1位「特に不満はない」、女性1位「水道料金が高い」		10ページ
■ 水と災害		
◇ 日頃不安や心配に感じていること、4人に1人以上が「特に感じない」		10ページ
◇ 不安に感じる災害トップ3変わらず。東京圏での数値減少目立つ		11ページ
◇ 災害時の水の備え「ペットボトル入りの水を買って置く」人が過去ワースト2…トピック【2】		11ページ
■ 水と生活・文化		
◇ 市販のペットボトル入りの水を飲む頻度、今後の飲用意向ともに昨年同様		12ページ
◇ 温室効果ガス排出ゼロ実現のために毎月払える金額の平均1,265円…トピック【3】		12ページ
◇ 知っている祝日・記念日で「水の日」の認知率が過去最高		12ページ

【調査概要】

第27回（令和三年度）「水にかかわる生活意識調査」

- ◆ 調査対象数 : 1,500人
- ◆ 調査対象者 : 東京圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)、大阪圏(大阪、兵庫、京都)、中京圏(愛知、三重、岐阜)に居住する20代から60代の男女
- ◆ 調査方法 : インターネット調査
- ◆ 調査期間 : 令和三年6月3日(木)～6月8日(火)
- ◆ 回収数(人) :

	東京圏		大阪圏		中京圏		合計		小計
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
20代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
30代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
40代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
50代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
60代	50	50	50	50	50	50	150	150	300
合計	250	250	250	250	250	250	750	750	1,500
	500		500		500				

水意識の変遷

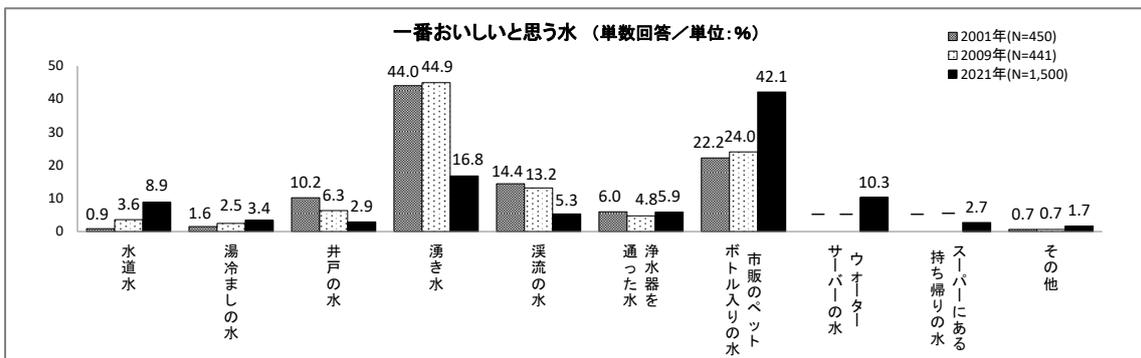
ミツカン水の文化センター「水にかかわる生活意識調査」は、同じ設問の定点調査を基本としながら、その時々
の社会やトレンドを踏まえた調査を毎年行ってきました。今年も、飲み水としての水や地球環境への意識変化を探る趣
旨で、過去一定期間調査していた設問の中からいくつかを再調査。10年前の2011年（一部20年前の2001年）
と、現在との比較を行いました。

Q.一番おいしいと思う水は？（'21年:9択+その他/'09年・'01年:7択+その他）

◇「湧き水」に代わり、「市販のペットボトル入りの水」がトップに。

“自然の水”より“買う水”を選ぶ人が増加

1995年～2009年に調査していた一番おいしいと思う水について、今年改めて調査を行い、20年前の2001年
および約10年前の2009年と比較したところ、'01年・44.0%、'09年・44.9%で不動のトップだった「湧き水」
が、'21年・16.8%と大きく減少して2位に転落。代わって、'01年・22.2%、'09年・24.0%だった「市販のペッ
トボトル入りの水」が、今年42.1%と大きく上昇してトップとなり、3位「ウォーターサーバーの水」（10.3%）と合
わせると、半数以上が“買う水”を選ぶ結果となりました。一方、「湧き水」や「溪流の水」（'01年・14.4%、'09
年・13.2%、'21年・5.3%）といった“自然の水”は、いずれも数値を下げました。



※2009年以前はFAX調査/2001年および2009年の数値は不明数を母数より除いて再計算

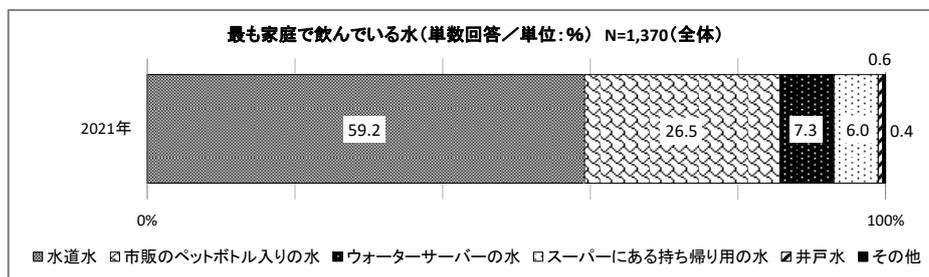
沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ①

【一番おいしいと思う水】

いつの間にか、なのか、いきなり、なのか、4割以上の方々が市販のペットボトル入りの水を一番おいしいと思うと答えるよ
うになった。20年前、12年前は2割強だったので、割合の増加は倍増に近い。といっても、水道水を一番おいしいと思う人が20
年前は1%ならず、12年前でも4%に満たなかったのに9%近くにまで倍増しているし、水道水への評価(9頁)も昨年に比べ
るとやや下がってはいるものの長期的には少しずつ上昇しており、水道水への不満(10頁)についても「特に不満はない」が4
割であるのを見ても、水道水をおいしくないと思っているわけではなさそうだ。

ペットボトルに人気を奪われたのは「湧き水」で、4～5割の方々が一番おいしいと以前は答えていたのに、半分以下の
16.8%となっている。溪流の水や井戸の水も同様に支持を大幅に失っているところから考えると、そもそも湧き水や溪流の
水、井戸の水を飲んだことのある人、飲んでいる人が激減しているのが原因なのかもしれない。

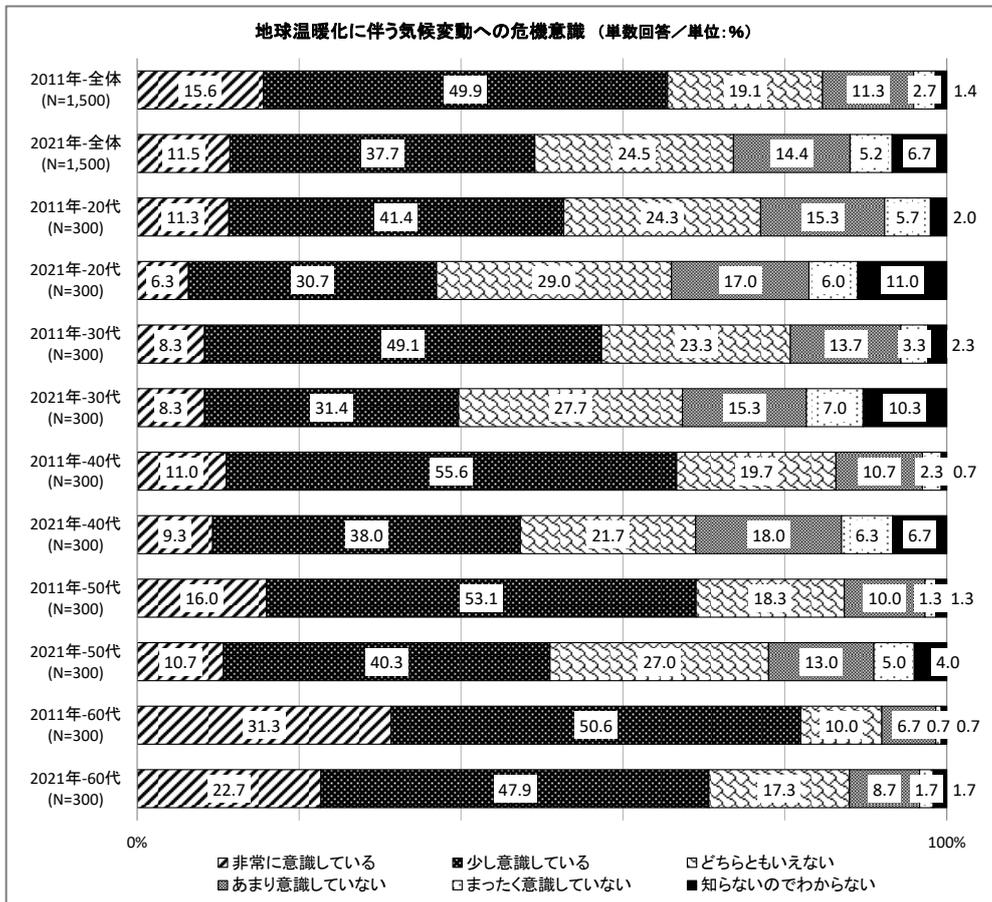
一方で、市販のペットボトル入りの水を最も家庭で飲んでいる水(下記)として選んだ方の割合は26.5%であり、今年選択
肢に加わったウォーターサーバーの水の場合でも10%を超える方々から「一番おいしいと思う水」として支持を得ているのに、
最も家庭で飲んでいる方々の割合は7.3%であり、おいしいと思うから毎日飲んでいる、もっとも飲んでいる、というわけでもな
いようだ。逆に、スーパーにある持ち帰り用の水を一番おいしいと思う割合は2.7%に過ぎないのに最も家庭で飲んでいると
した方は6%であり、比較的高いコストを支払ったものは素晴らしいと思ってしまう「威光価格」効果の影響があるのかもしれない。



Q.地球温暖化に伴う気候変動への危機意識は？（6択）

◇“意識している人”が大幅に減少。

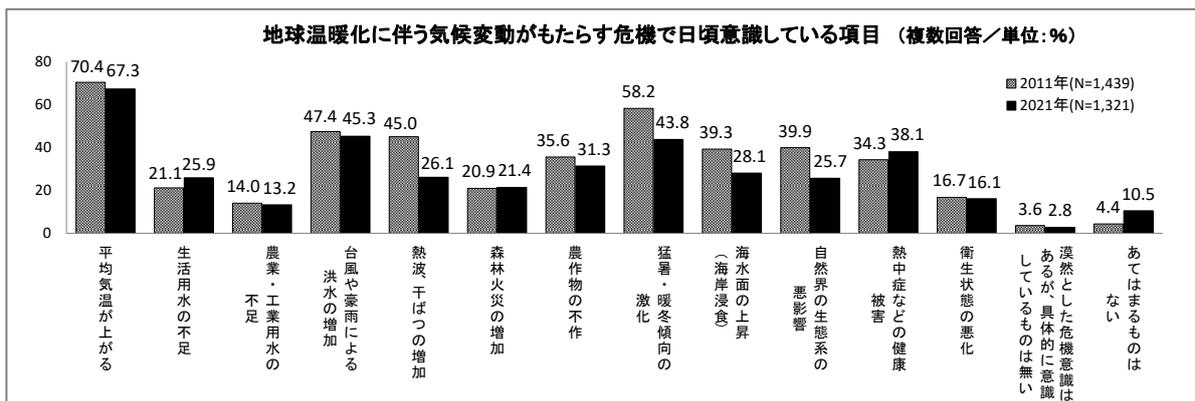
地球温暖化に伴う気候変動についての危機意識をどの程度持っているかについて、10年前の2011年と今年の結果を比較したところ、「非常に意識している」と「少し意識している」を合わせた“意識している人”は、'11年・65.5%→'21年・49.2%と大幅に減少し、半数を割り込みました。また、年代別でもすべての年代で減少。全体的な意識の低下をうかがわせる結果となりました。なお、低い年代ほど“意識している人”の割合が低い傾向は、10年前と同様でした。



Q.日頃意識している地球温暖化に伴う気候変動の危機項目は？（13択+あてはまるものはない）

◇トップ3に変化はないものの、自身の生活に直接影響を及ぼす危機には敏感？

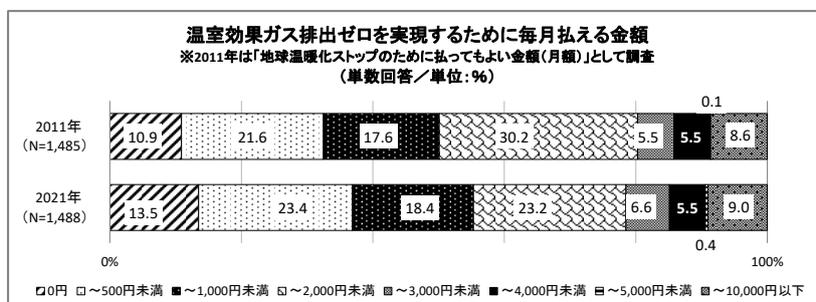
2011年と2021年を比較すると、両年で断然トップの「平均気温が上がる」を筆頭に、「猛暑・暖冬傾向の激化」（'11年:2位、'21年:3位）、「台風や豪雨による洪水の増加」（'11年:3位、'21年:2位）と、上位3項目に変化はありませんでした。一方、4位以下に目を向けると、2011年の4位「熱波、干ばつの増加」、5位「自然界の生態系の悪影響」は、2021年にそれぞれ7位、9位と順位を下げ、代わりに、「'11年は8位だった「熱中症などの健康被害」が4位、同7位の「農作物の不作」が5位に上昇。自身の健康や食生活に影響を及ぼす身近な危機には敏感になってきているのかもしれない。



Q.温室効果ガス排出ゼロを実現するために毎月払える金額は？（金額を自由回答）

◇ボリュームゾーンが「2,000円未満」から「500円未満」に。

今回、「2050年までに温室効果ガスの排出ゼロを実現するために毎月払える金額」について調査を行い、2011年の「地球温暖化をストップさせるために毎月払える金額」との比較を行ったところ、2011年のボリュームゾーンだった「1,001円～2,000円未満」の金額を回答した人（30.2%）が、今年は23.2%と減少し、「1円～500円未満」（'11年・21.6%→'21年・23.4%）がボリュームゾーンとなりました。また、「0円」と回答する人も若干増加しました（'11年・10.9%→'21年・13.5%）。



※「10,001円以上」を回答した場合には不明として集計（2011年:15件、2021年:12件）

沖大幹先生による解説 ～Okī's View～ ②

【地球温暖化に伴う気候変動への危機意識】

地球温暖化は気温が上昇するだけでなく、気候の変動そのものであり、台風を含む高気圧や低気圧の分布とそれらの移動、雨の降り方、風の吹き方、雲のでき方など日々の気象の様相が変わる。さらには、極端な高温や豪雨、あるいは寡雨の頻度が増え、熱波や干ばつに伴う健康や自然生態系、農業生産や水資源確保への悪影響が懸念されている。気温の上昇に伴って海面水位も上昇して海岸浸食や高潮の危険性も高まるし、水害リスクも変化する。

そういう意味では、「日頃意識している地球温暖化に伴う気候変動の危機項目」(4頁)の選択肢はどれも地球温暖化に伴う気候変動によって人間社会にもたらされる危機なのであるが、回答者が日頃意識しているのは気温の上昇とそれに伴う猛暑や暖冬傾向の激化、ついで熱波や水害の頻度の増加くらいで、水不足や森林火災にまで思いが及ぶ方は2割程度のものである。

もちろん、気候変動によって豪雨や干ばつの頻度が増大しても直ちに社会に悪影響を生じるというわけではない。日本の様に洪水被害や水不足に対応できる備えをある程度整えている社会では普段の暮らしでそうした危険性を意識する機会が少ないのに対し、現在でも頻繁に森林火災や農業生産の不作といった被害に見舞われている地域では、さらに頻度が増大し、被害が日常化して、これまでになかったような深刻な影響を受ける可能性がある。現在の危険性への対処が、将来の気候変動に伴う影響回避のための第一歩なのである。

【温室効果ガスの排出ゼロを実現するための費用負担】

1か月の平均額が1,265円(12頁)。一日あたり平均40円程度という少なくとも感じるかもしれないが、年間15,000円強、家族の分まで払うと4人で年間60,000円強とそれなりの金額になるのだが、その程度の金額は払ってでも気候変動対策をした方がよいと思っている方が多いということだろう。1,000～2,000円と答えた方が全体の約1/4で、500～1,000円の方と併せて全体の4割を占める。0円と答えた方が13.5%であるのに対し、5,000円以上払ってもよいと答えた方も10%近くに上る。

日本全体の1人あたりの排出量が2018年時点で8.5tであるので、いわゆる炭素税を1tCO₂あたり30ユーロとすると、1人あたり年間約34,000円となる。本調査結果の2倍を超える額を支払う必要性が出てくるように思えるかもしれないが、実は地球温暖化対策のための税に加えて揮発油税や排出枠価格などを含めた日本の実効炭素価格が1tCO₂あたり約30ユーロとされているので、私たちは“払っていい”と思っている額の倍以上を現在でも負担しているのである。

将来的には1tCO₂あたり現在に比べて3倍くらいの負担が求められるようになるのではないかと推計されるが、現状がそうであるように、普段の暮らしでは意識されない形で、二酸化炭素を多く排出して製造されるモノや提供されるサービスはやや高く、そうでないモノやサービスも波及効果を受けてやや高くなる、といった形で社会的なコストを負担し、2050年までに温室効果ガスの排出正味ゼロの実現に向けた取り組みが進むことだろう。

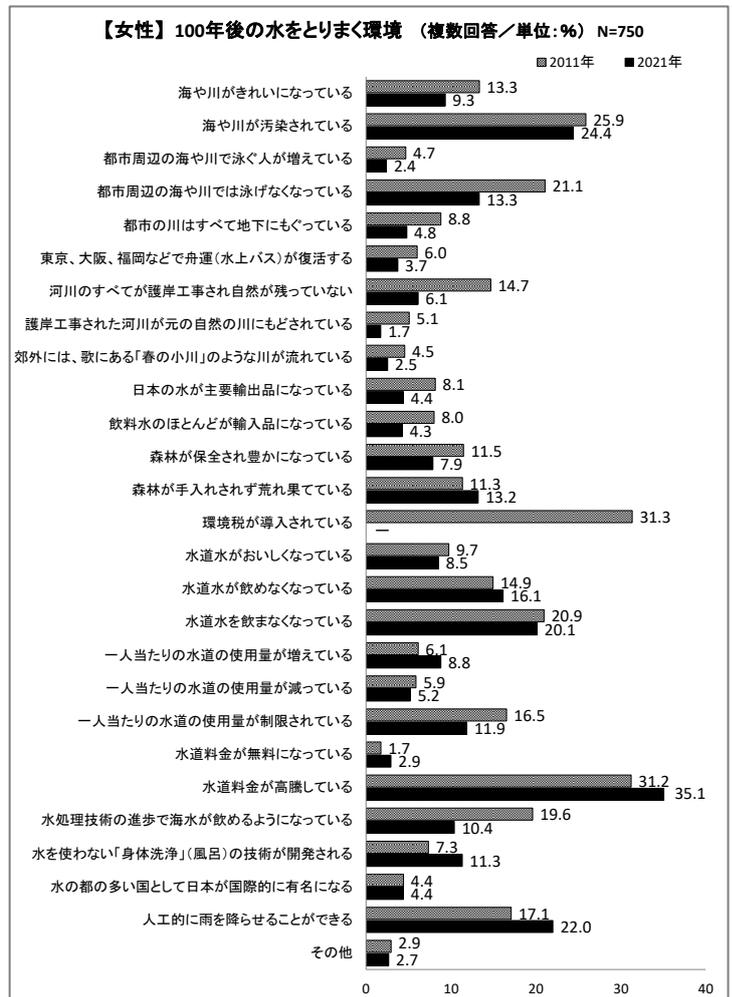
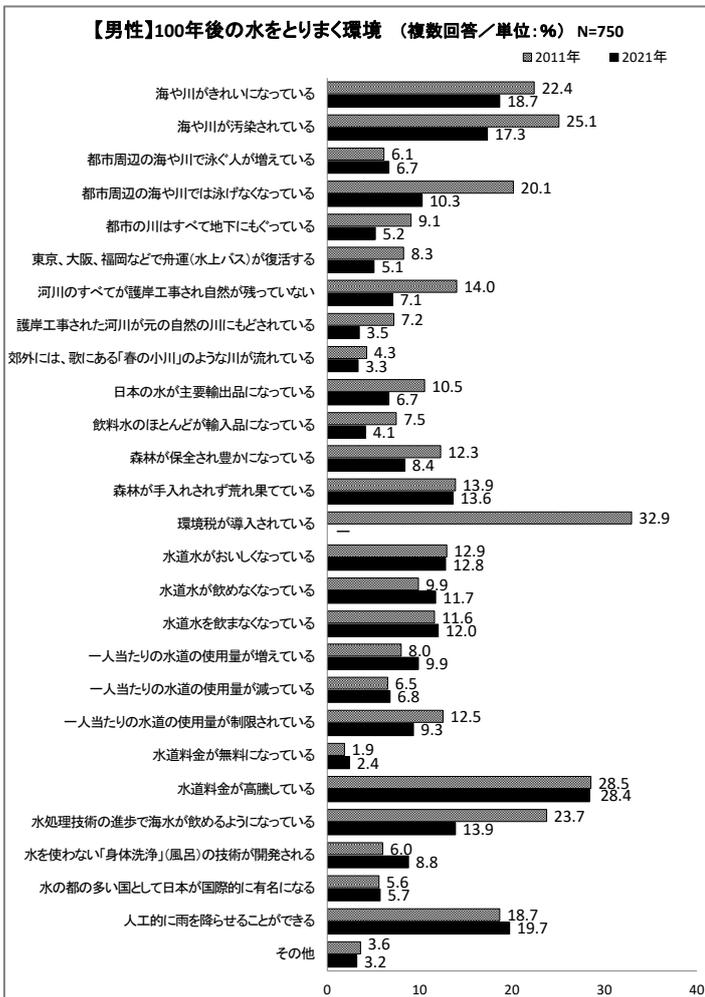
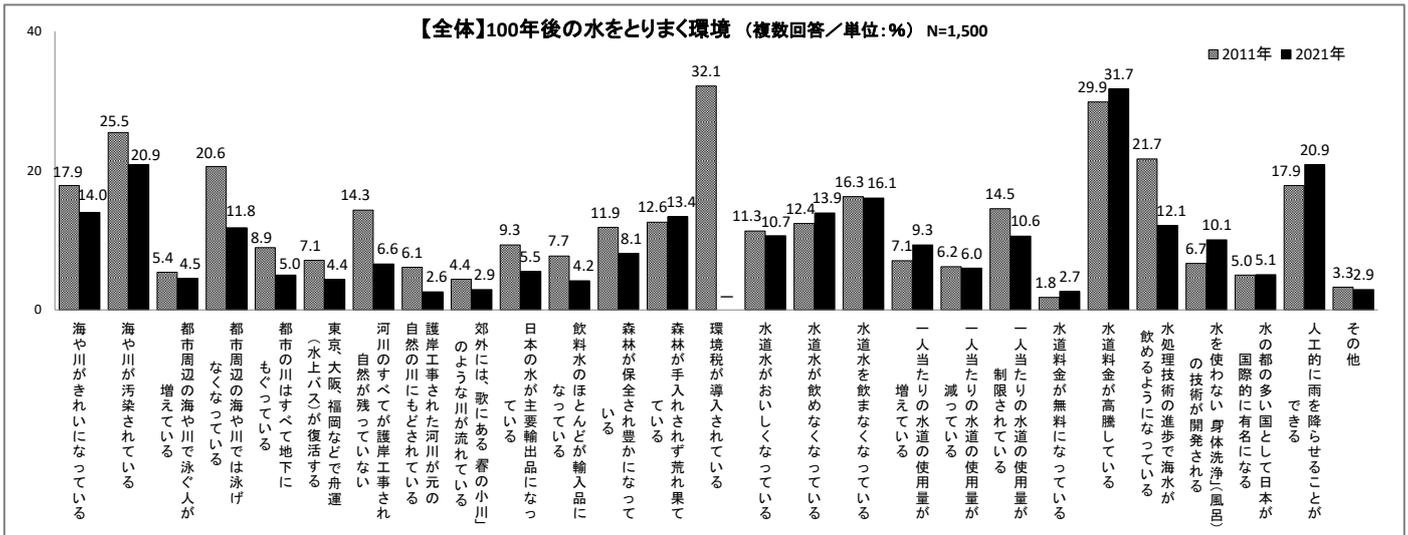
この際に重要なのは、炭素価格として徴収された財源が、温室効果ガス排出削減のための投資や研究開発のみならず、それでも進行してしまう気候変動に伴う浸水被害や健康被害への対策といった適応策への投資や、エネルギー供給やマテリアルチェーンの大変革に伴う社会変化によって、生業の変革を余儀なくされる人や組織に対する再配分を公正に行うことである。

Q.100年後の水をとりまく環境は？（'21年:25択+その他/'11年:26択+その他）

◇全体的な数値の減少は、環境が変化しないとの予測？

100年後（2121年）の水をとりまく環境については、項目によって違いはあるものの、全体的に数値が減少しました。これは、環境への意識の低下からなのか、100年後の将来も環境は変わらないとの予測なのかなど、さまざまな要因が考えられますが、総じて関心の度合いが下がっているとは言えるかもしれません。

また、「海や川がきれいになっている」「海や川で泳ぐ人が増えている」「森林が保全され豊かになっている」といったポジティブな項目に比べ、「海や川が汚染されている」「海や川では泳げなくなっている」「森林が手入れされず荒れ果てている」などネガティブな項目の数値が高い傾向は、10年経過した現在も変わりませんでした。ただし、男女別だと、男性は「海や川がきれいになっている」（18.7%）が「海や川で泳げなくなっている」（17.3%）をわずかに上回る（'01年はそれぞれ22.4%、25.1%）など、ポジティブがネガティブを逆転する項目が一部見られました。



【100年後の水をとりまく環境】

100年前といえば、日本は大正デモクラシー。内地の人口は約5,600万人だが、台湾の人口が約375万人、朝鮮半島の人口が約1,700万人で、平均寿命は約42～43歳と現在の半分であった。国内総生産(GDP)はまだその概念が生まれていなかったが、購買力平価で実質現在の5～6%程度に過ぎなかったと推計され、電燈普及率が6割で、水道普及率は2割程度、電話加入数は50万程度であった。東京の平均気温は14.2度と現在の16.4度よりも2.2度低かった。農業従事者が就業者の半数を占め、日本中に用排水路が張り巡らされ、小学校の水泳用プールの普及率は10%にも満たなかったと推定される。関東大震災も阪神・淡路大震災も東日本大震災もまだで、太平洋戦争直後に日本を襲ったカスリーン台風や伊勢湾台風などの水害が生じる前であり、大河津分水路は完成間近で、荒川放水路はまだ工事中だったのが100年前である。

100年前から現在までの変化に思いを馳せると、水をとりまく環境、普段のわたしたちの暮らし、そして人生のあり方そのものが大きく変わっているのにめまいを覚えるほどである。これから100年すれば、過去100年ほどではないにせよ、やはり思いもよらないような変化が生じるに違いない。

それなのに、100年後の水をとりまく環境が現在から良くなると答えた方も悪くなると答えた方も10年前に比べると概ね減っている。現状への満足なのか、失われた10年、20年というプロパガンダで変化への希望を失ってしまったのかは不明だが、変化に期待しなくなっている、ということだろうか。

森林が荒廃する、水道水が飲めなくなる、水道使用量が増える、人工降雨の実現などについてはややそういう見通しを持つ方の割合が増えている様だが、おもしろいのは、水道料金が無料になるという少数の方々の割合も、水道料金が高騰する、という3割程度の方々の割合もどちらも増えている点である。水道法改正に伴って水道事業の在り方が変化しつつある中、両方の見方が交錯しているのかもしれない。

好む好まざるにかかわらず世の中は変わるし、できれば好ましい方向に変化した方が良い。水をとりまく環境についても、そんな夢と大志を抱けると良いのに、と思う。

コロナ禍における日常の水意識

新型コロナウイルス感染症の拡大により社会が急変し、私たちの日常生活も大きく変わりました。そこで、コロナ禍における生活、水への意識・実態の変化を探る設問で調査したところ、手洗いなど感染対策における直接的な項目での顕著な変化に加え、料理をする頻度や、海・川に行く頻度の増減からも、テレワークやステイホームによる間接的な影響を垣間見ることができました。

Q.手を洗う頻度は？ (3択)

Q.1回あたりの手を洗う時間は？ (3択)

Q.入浴やシャワーの頻度は？ (3択)

◇手を洗う頻度は約7割、1回あたりの手を洗う時間は約半数が「増えた」。

入浴やシャワーの頻度は「変わらない」が大多数。

手を洗う頻度は、全体の約7割(68.3%)が「増えた」と回答し、「変わらない」(30.9%)を大きく上回りました。また、1回あたりの手を洗う時間についても、半数近く(49.8%)の人が「増えた」と回答。感染対策における個々の取り組みがそのまま表れた結果と言えます。一方、入浴やシャワーの頻度については、大多数の人が「変わらない」(86.9%)でした。

Q.料理をする頻度は？ (3択)

Q.洗濯の頻度は？ (3択)

Q.掃除(水拭き)の頻度は？ (3択)

◇料理の頻度は約3割が「増えた」も、洗濯・掃除は8割超が「変わらない」。

料理をする頻度は、全体の約3割(27.5%)が「増えた」と回答しました。一方、洗濯の頻度は、「変わらない」が81.3%と大半を占め、「増えた」は15.0%と少数派でした。また、掃除(水拭き)の頻度も、8割超(83.8%)が「変わらない」、「増えた」は1割程度(11.9%)で、洗濯とほぼ同様の傾向でした。

Q.海・川・湖に行く頻度は？（3択）

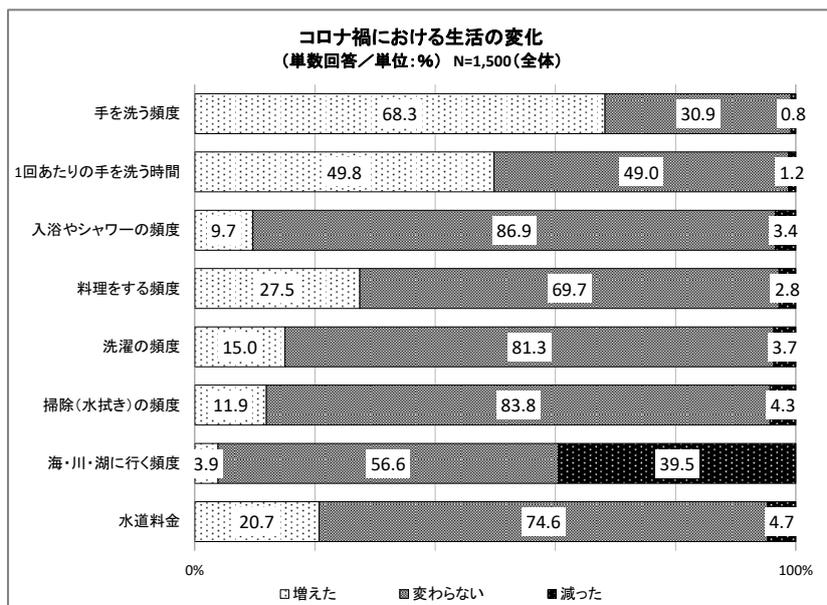
◇約4割が「減った」と回答。

海・川・湖といった水辺に行く頻度は、「変わらない」が過半数を占めるものの、約4割（39.5%）が「減った」と回答。コロナ禍でステイホームを強いられ、外出の機会が減少していることをうかがわせる結果となりました。

Q.水道料金は？（3択）

◇「増えた」人は2割程度。

水道料金については、「増えた」と回答した人が20.7%となりました。コロナ禍における生活で、自宅での手洗いや料理をする機会の増加に伴い、水を使う量は総じて増えているであろうと推測されますが、水道料金が変わったという人はそれほど多くはないようです。



節水の意識と行動

Q.日常生活で節水を意識しているか？（2択）

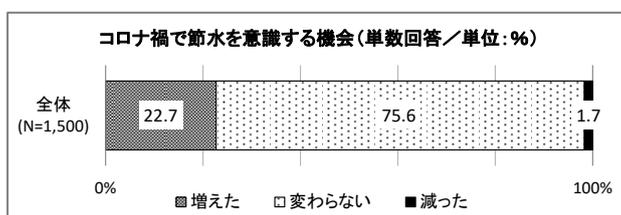
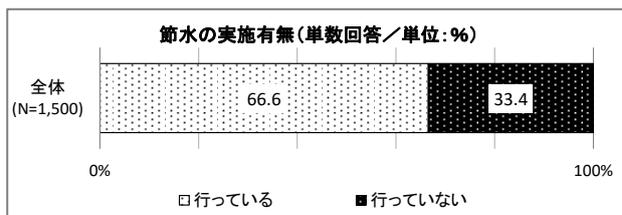
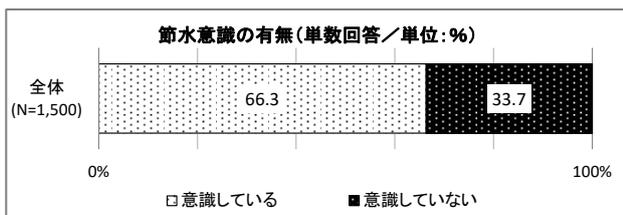
Q.日常生活で節水を実施しているか？（2択）

Q.コロナ禍で節水を意識する機会は増えたか？（3択）

◇節水意識と行動、ともに昨年を下回るもほぼ変化なし。コロナ禍で節水意識が上がった人は2割程度。

生活者における節水への意識と行動の明確化を目的に、2019年より新たな設問で行っている節水評価ですが、今年の結果は、節水を「意識している」が66.3%、節水を「行っている」が66.6%となりました。いずれも昨年（意識:69.5%、実施:68.5%）をやや下回ったものの、ほぼ変化はなく、これらの結果からは、コロナ禍の影響はほとんど見られませんでした。

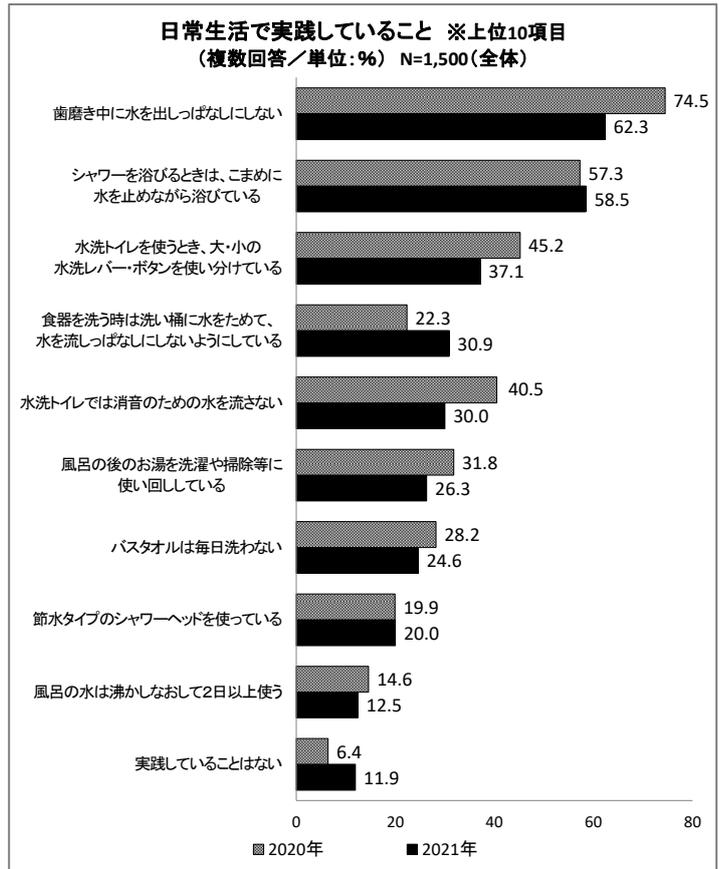
ちなみに、コロナ禍で節水を意識する機会が増えたかについて聞いたところ、7割超（75.6%）が「変わらない」と回答し、「増えた」人は2割程度（22.7%）でした。



Q.日常生活で実践していることは？（14択+その他+実践していることはない）

◇項目ごとの取り組み率に変化あり。

節水や再利用の方法に関する項目を選択肢にあげ、日常生活で実践していることについて聞いたところ、1位「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」（62.3%）、2位「シャワーを浴びるときにこまめに水を止める」（58.5%）、3位「水洗トイレの大小レバー・ボタンを使い分ける」（37.1%）となり、トップ3は順位、項目ともに昨年と同様でした。しかし、それぞれの数値に目を向けると、「歯磨き中に水を出しっぱなしにしない」は昨年（74.5%）から12.2ポイント、「水洗トイレの大小レバー・ボタンを使い分ける」は8.1ポイント（昨年45.2%）と大きく減少しています。加えて、4位「食器を洗うときは水を流しっぱなしにしないようにしている」（30.9%）は昨年（22.3%）から8.6ポイント増加し、5位「水洗トイレでは消音の水を流さない」（30.0%）は10.5ポイント減少（昨年40.5%）するなど、項目ごとの取り組み率に変化が見られました。

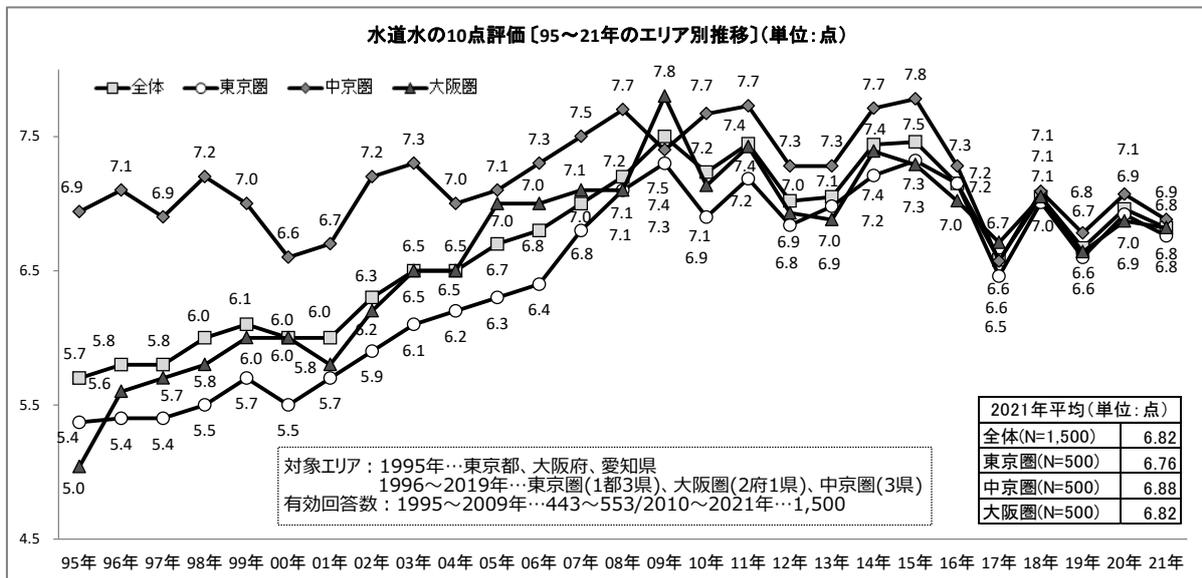


水道水に関する意識

Q.水道水を10点満点で評価すると？（0～10の整数を自由回答）

◇全体、居住地別ともに昨年とほぼ変わらず。

水道水の10点満点評価は、全体の平均が昨年比0.14ポイント減の6.82点となり、居住地別でも東京圏が0.16ポイント減の6.76点、中京圏が0.19ポイント減の6.88点、大阪圏が0.05ポイント減の6.82点と、いずれも昨年をわずかに下回ってはいるものの、ほぼ変わらないという結果でした。昨年、唯一7点台に回復した中京圏は、再び6点台となりました。

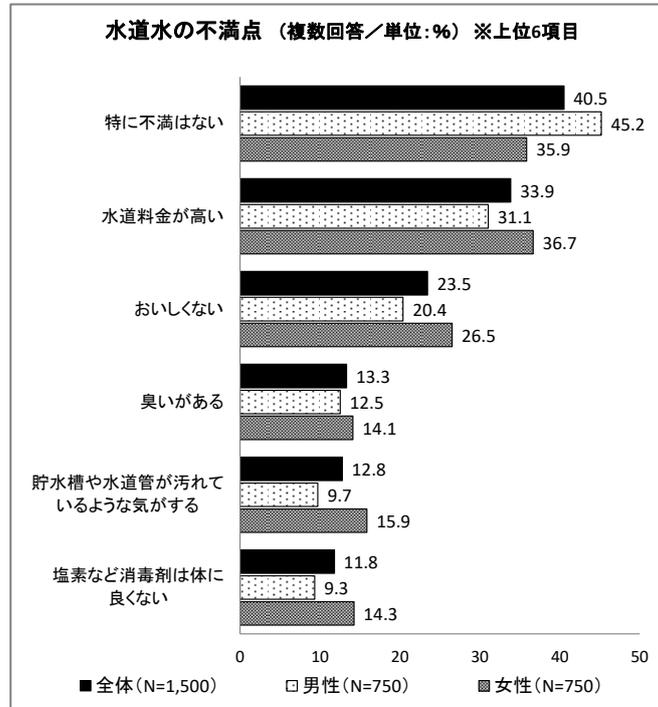


Q.水道水について不満を感じていることは？（8択＋その他＋特に不満はない）

◇全体の1位は「特に不満はない」。女性は「水道料金が高い」がトップ。

水道水への不満については、全体の4割超（40.5%）が「特に不満はない」と回答し、昨年に続き1位でした。2位（不満のトップ）は「水道料金が高い」（33.9%）で、以下、3位「おいしくない」（23.5%）、4位「臭いがある」（13.3%）となり、上位は昨年と変わりありませんでした。

男女別では、男性は「特に不満はない」（45.2%）、女性は「水道料金が高い」（36.7%）がそれぞれのトップとなり、昨年とは逆の結果になりました。

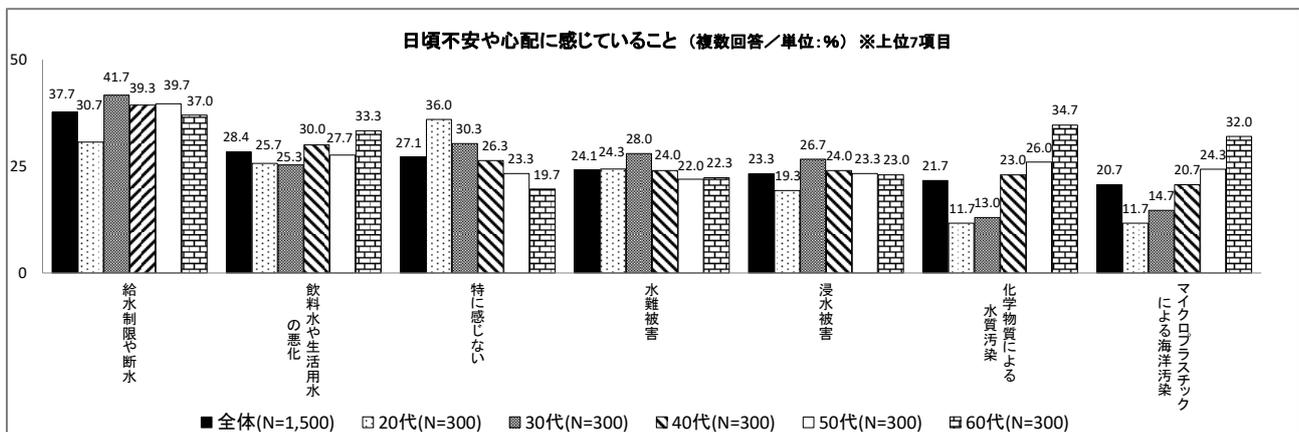


水と災害

Q.日頃不安や心配に感じていることは？（13択＋特に感じない）

◇各項目とも数値が減少し、4人に1人以上が「特に感じない」と回答。

日頃不安や心配に感じている事柄について聞いたところ、1位「給水制限や断水」（37.7%）、2位「飲料水や生活用水の悪化」（28.4%）、3位「特に感じない」（27.1%）、4位「水難被害」（24.1%）、5位「浸水被害」（23.3%）となりました。トップ5は、「特に感じない」（昨年7位）を除いてすべて昨年と同様でしたが、各項目とも昨年より数値が減少しており、「特に感じない」のみが5.4ポイント増で順位も上昇しました。なお、年代別でみると、20代は全年代で唯一、「特に感じない」（36.0%）が1位という結果でした。



Q.不安に感じている災害は？（24択+その他+特に不安を感じたことはない）

◇トップ3は「台風」「地震」「ゲリラ豪雨」で変わらず。

東京圏で各項目の数値減少が目立つ。

不安に感じている災害は、1位「台風」（58.7%）、2位「地震」（53.1%）、3位「ゲリラ豪雨」（43.5%）のトップ3に加え、4位「断水」（29.6%）、5位「火災」（28.4%）、6位「水不足（渇水）」（25.7%）といった上位項目の順位に変動はありませんでした。「ゲリラ豪雨」を除いたこれらの項目は、いずれも数値が減少しており、中でも東京圏は、「台風」（昨年比9.8ポイント減）、「地震」（同10.2ポイント減）、「断水」（同8.6ポイント減）など、他のエリアと比べて数値の大きな減少が目立ちました。

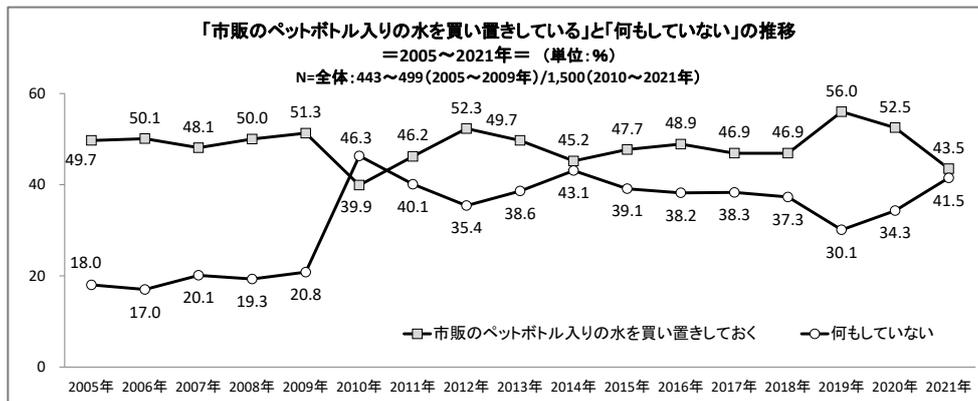
Q.災害時に対する水の備えは？（7択+その他+何もしていない）

◇「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」人が過去ワースト2。

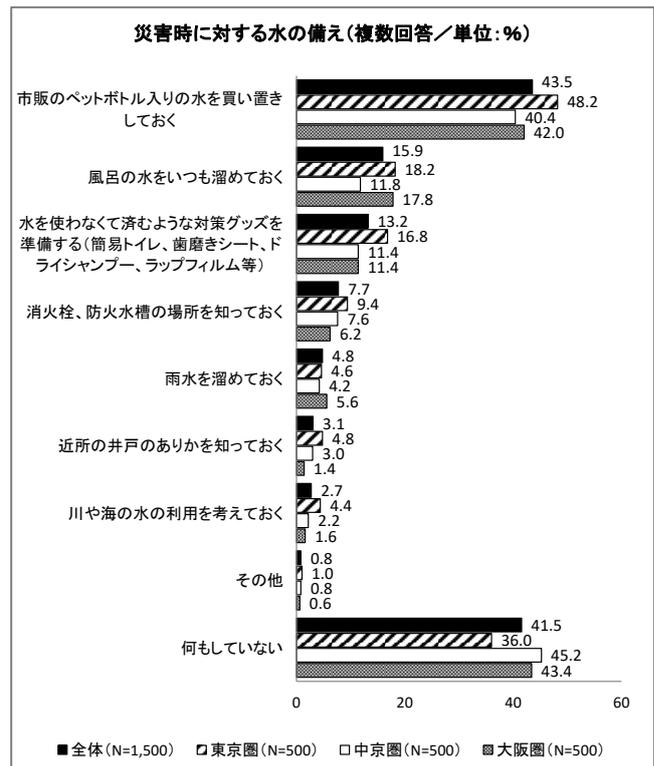
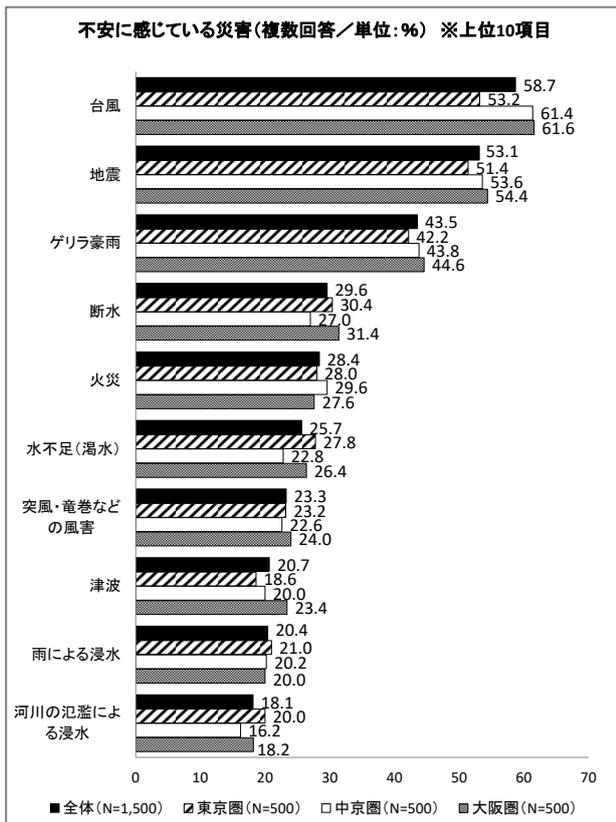
「何もしていない」人は4割超に。

災害時に対する水の備えは、全体では「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」（43.5%）が「何もしていない」（41.5%）をわずかに上回り、辛うじてトップを死守したものの、昨年（52.5%）から大きく数値を下げ、同設問の調査を開始した2005年以降、2010年の39.9%に次ぐワースト2の数値となりました。

居住地別にみても、「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」は、各エリアで数値が減少しており、特に中京圏では昨年（54.6%）からマイナス14.2ポイントと大きく減少しました。ちなみに、「市販のペットボトル入りの水を買って置きしておく」がトップのエリアは、東京圏のみでした。



※2009年以前はFAX調査/2001年および2009年の数値は不明数を母数より除いて再計算



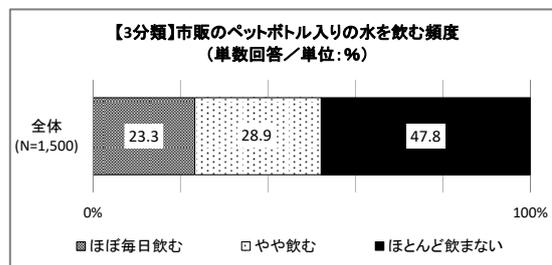
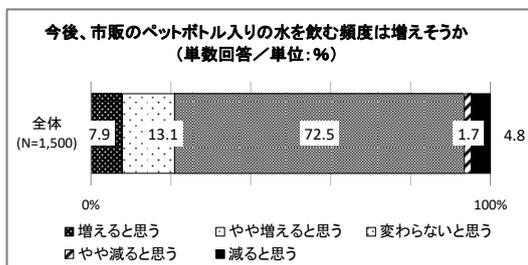
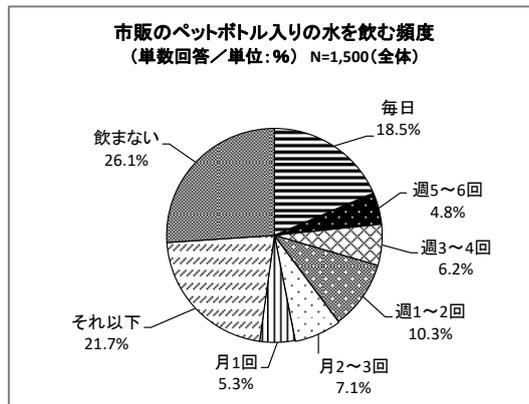
Q.市販のペットボトル入りの水を飲む頻度は？（7択＋飲まない）

Q.今後、飲む機会が増えると思うか？（5択）

◇飲む頻度のボリュームゾーンは昨年同様。

普段、市販のペットボトル入りの水を飲む頻度は、「毎日」「週5～6回」を合わせた週5回以上の“ほぼ毎日飲む人”が23.3%で昨年（23.6%）とほぼ変わらず、「週3～4回」「週1～2回」「月2～3回」「月1回」を合わせた週4回～月1回の“やや飲む人”が5.1ポイント減の28.9%、「それ以下」「飲まない」を合わせた“ほとんど飲まない人”が5.4ポイント増の47.8%で、ボリュームゾーンは変わりませんでした。

また、今後飲む機会が増えると思うかについては、「変わらないと思う」が7割超（72.5%）を占め、「増えると思う」「やや増えると思う」を合わせた“増加意向のある人”が2割程度（21.0%）、「減ると思う」「やや減ると思う」を合わせた“減少意向のある人”は1割に満たない6.5%で、昨年とほぼ同様の結果となりました。



Q.温室効果ガス排出ゼロを実現するために毎月払える金額は？（金額を自由回答）

◇全体の平均額は、1,265円。年代別トップは20代の1,470円。

前述の「2050年までに温室効果ガスの排出ゼロを実現するために毎月払える金額」（5頁）について、回答金額の平均を見たところ、全体の平均金額は1,265円でした。年代別にみると、20代が1,470円と全年代で最も高く、最も低かった60代（1,107円）より300円以上高い金額となりました。「地球温暖化に伴う気候変動への危機意識」の設問（4頁）では、20代は危機を意識している人の割合が60代の半数強程度でしたが、環境への支出には積極的な姿勢がうかがえました。

温室効果ガス排出ゼロを実現するために毎月払える金額(年代別平均)

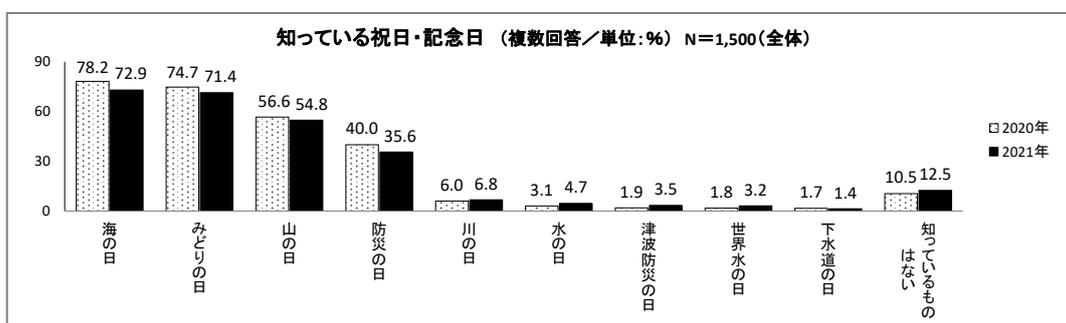
年代	平均金額
全体 (N=1,488)	1,265円
20代 (N=295)	1,470円
30代 (N=298)	1,331円
40代 (N=297)	1,195円
50代 (N=298)	1,228円
60代 (N=300)	1,107円

※「10,001円以上」を回答した場合には不明として集計（12件）

Q.知っている祝日・記念日は？（9択＋知っているものはない）

◇「水の日」の認知率が過去最高。

水や自然にかかわる祝日・記念日の認知は、例年、「みどりの日（5月4日）」「海の日（7月第3月曜日）」「山の日（8月11日）」といった祝日の数値が高く、「防災の日（9月11日）」を除いた祝日以外の記念日は一桁台の認知率となっており、今年も同様の傾向でしたが、そんな中、「水の日（8月1日）」の認知率が本設問の調査を開始した2016年以来、過去最高（4.7%）となりました。当センターとしては、今後も「水の文化」に関するより一層の普及・啓発に取り組むとともに、その取り組みが「水の日」認知向上の一助になることを願っています。



沖大幹先生プロフィール

沖 大幹（おき たいかん）
東京大学 大学院工学系研究科 教授
「ミツカン水の文化センター」アドバイザー

1964年東京生まれ。1993年博士（工学、東京大学）、1994年気象予報士。1989年東京大学助手、1995年同講師等を経て2006年より同教授。2016年より国連大学上級副学長、国際連合事務次長補を兼務。専門は水文学（すいもんがく）で、地球規模の水循環と世界の水資源に関する研究。書籍に『水の未来』（岩波新書、2016年）、『水危機 ほんとうの話』（新潮選書、2012年）など。生態学琵琶湖賞、日経地球環境技術賞、日本学士院学術奨励賞など表彰多数。日本人として初の国際水文学賞Doogeメダル受賞(2021年)。



「ミツカン水の文化センター」と「水にかかわる生活意識調査」について

創業の地である愛知県の知多半島は水が得にくい土地柄だったため、文化元年（1804年）の創業時より、良質な醸造酢をつくる為に山から木樋で水を引くなど、水の苦勞を重ねてきました。また、廻船で尾張半田から江戸まで食酢を運んで社業の基礎を築くなど、水と深いかかわりを持ってまいりました。

このように創業以来、「水」の恩恵を受け、「水」によって育てられてきたミツカングループは、1999年に「水の文化センター」を設立し、「水」をテーマとする社会貢献活動を行なっています。

「水にかかわる生活意識調査」は、1995年にセンターの活動開始に先駆けて、「日常生活における水とのかかわり」について調べてみようと考えたのがきっかけで始まり、さまざまな生活の中での水への意識を、四半世紀にわたり調査し発表しています。